「伝説の薬剤師」

概要

　伝説の薬剤師は、学者と思いきや実は靴磨き。星のあざを頼りに探すことになるの。

ハンドアウト

依頼主：町人

　娘が病にかかってしまった、医者に見せたのだがお手上げらしい。だがしかし、この町にいると言われる伝説の薬剤師なら治してくれるかもしれない。伝説の薬剤師を探し出してほしい。

初期証拠カード　「伝説の薬剤師」

記者「伝説の薬剤師ですか・・・。たしか、特徴的な星形のあざがあるという噂が。」

　　　**証拠カード「星の形をしたアザ」を渡してください**。

商人「うん・・？ああ、前に路地裏で酔って死にそうなときにね、誰かが薬を飲ませてくれたら、凄く

　　　楽になってね。・・・顔は覚えていないが・・その人の事ではないだろうか？」

　　　**証拠カード「路地裏の治療者」を渡してください**

靴磨き「私のような・・しがない靴磨きが、伝説の靴磨きなわけがないでしょう・・？」

他　「うーん。たしか伝説の無免許薬剤師、って噂だね。詳しいことは・・まぁ、噂なら

　　　記者さんに聞いてみればいいんじゃないかな？」

学者「あいにく・・私ではないよ。医学も多少なら心得はあるが、そこまでの腕ではないし」

「星の形をしたアザ」に対して

学者「ああ、確か前に靴磨きがアザを消したいとかいってきたなぁ。たしか星形のアザだったんで、

　　　珍しいと思ったもんだ」

　　　**証拠カード「星のアザの持ち主」を渡してください。**

マスター「あぁ・・・そういえば、靴磨きのあざの形は特徴的だった気がするなぁ・・・」

靴磨き「私にもアザはありますが・・・星形なんてアザは持ってはいませんよ」

他　　「アザですか・・？それも星形の・・・？わかんないですねぇ。」

「星のアザの持ち主」に対して

靴磨き「学者先生に聞いたのは、目立つうえに不気味なモノでしたから・・特に意味はありませんよ。」

他「へぇ・・・そうなのかい？星のアザとは変わってるねぇ。でも、消そうとするほどの理由じゃないね？」

「路地裏の治療者」に対して

靴磨き「たしかに、私は路地裏に住んでますが・・・。そんな大それたものではございませんよ」

新聞記者「直接関係あるかはわかりませんけど・・。靴磨きさんって、意外と博識で、

　　　　　路地裏の浮浪者さんには健康面とかお世話になっている人はおおいみたいですよ？」

他　「うーん・・路地裏は縁がないからなぁ・・・新聞記者さんとか詳しくないですかね？」

「路地裏の治療者」「星のアザの持ち主」に対して

　　靴磨き「やれやれ・・・そこまで調べはついているんですか。昔の話ですよ。

　　　　　今はもうただ静かに暮らしたいだけで・・面倒事はこりごりですのに・・・

　　　　　まぁ、一度だけならよいでしょう・・」

**真相カード「伝説の薬剤師」を渡してください。**

　　他「・・・うーん。靴磨きさんに直接聞いてみたらいかがでしょうか？」

「届かなかった贈り物」

概要

　たらいまわし。それだけ。ざまぁｗｗｗ。

ハンドアウト

依頼人：貴族

　芸術家の友人から、プレゼントが送られたんだのだが、宅配業者の手違いで途中で紛失してしまった。

　中身はわからないが、紅白の箱で送られたことは確かだ。是非探し出して持ってきてほしい。

初期証拠カード「紅白の箱」に対して

　靴磨き「あ・・あれか？拾ったんだよ。中身は女神像だったんだ・・・え？商人に売っちまったよ。」

　　　　　**証拠カード「女神像」をわたしてください。**

　貴族　「是非見つけ出してくれたまえ。」

　他　　「紅白の箱？いや、知らないが・・・。」

証拠カード「中身は女神像」に対して

　商人「え？女神像？ああ。アレなら数日前に学者様が買っていきましたよ。なんでも、

　　　　ヴィーナスとかいうのがあの像の名前らしいですね。」

　　　**証拠カード「ヴィーナス像」を渡してください。**

　貴族「へえ。中身は女神像だったのか。探してきてくれたまえ！！」

他「女神像か・・・。それは見ていないな。」

証拠カード「ヴィーナス像」に対して

　学者「え？ヴィーナス像かい？ああ。それなら、新聞記者にあげてしまったよ。

　　　　もっとも彼は、私の訂正に関わらず、最後まで裸の像としか呼んでなかったが。」

　　　**証拠カード「裸体像」を渡してください。**

　貴族「ほう。ヴィーナス像？どんなものだろうか？楽しみだ。」

　他「ヴィーナス像？いや、そんなものは見ていないが・・・」

証拠カード「裸体像」に対して。

　新聞記者「ああ、裸の像？あったねぇ。正式名称はなんだったかなぁ？でもね、酒場のマスター

　　　　　　にみつかっちまって、借金の方にとられちゃったんだ。悪いね。」

　　　**証拠カード「ツケのカタ」を渡してください。**

貴族「裸体像か・・・？ダビデとかかねぇ。」

　他「裸体像・・・？そんなものもしらないなぁ。」

証拠カード「ツケのカタ」に対して

　マスター「ああ。あったねぇ。いや、貴族様との賭けに使って、すぐ手放すことになっちゃったから、

　　　　　どんなもんだったかは覚えてないんだけどね。貴族様が持ってるはずだよ」

　　　**証拠カード「ギャンブルのベット」を渡してください。**

　貴族「酒場のツケに人のものを使うなよ、ってねぇ・・・？」

　他　「いや・・酒場のツケが私たちにどう関係あるんで？」

証拠カード「ギャンブルのベット」に対して

貴族「ウッソ・・・！あれだったのか！！いやあ、スマンスマンまさか手元に戻って来るとは！！

　　　いやー本当にご苦労だったな！！アッハッハ」

**真相カード「数奇な運命」を渡してください。**

　他　「ああ。マスターと貴族さんはよくギャンブルしてるからね。」

「消えたネクタイ」

概要

　ネクタイを誰に貸したか？記者は商人に貸したが、商人の店の店員が、仕入れの品と勘違いして、

　学者先生へと売ってしまっていたのだった。

ハンドアウト

依頼主：記者

　最近、ネクタイを商人へ貸したのだが、いつになっても帰ってこない。

　忙しくて、時間が取れないので、代わりにネクタイを取り戻してほしい。

初期証拠カード「ネクタイは商人のもとへ」

商人「そんな話もしたが、実際に私は借りてはいない。別の人と勘違いしたのではないだろうか？」

学者「記者？私は記者に特に借りているものはないよ？」

マスター「そういえば。記者さんが前につけていたネクタイと同じものを最近学者さんがつけているな。

　　　　何か関係があるのではないかな？」

**証拠カード「マスターの証言」を渡してください。**

他「うーん・・商人さんとはよく会うが変わった様子はないなぁ。よく顔を合わせているマスター

　　なら何か知っているんじゃないか？」

「マスターの証言」に対して

学者「うん・・・？このネクタイは私が商人のところでかったものだが？領収書だってある。

　　　気になるなら記者のところへ持って行ってもかまわないが？」

　　**証拠カード「ネクタイと領収書」を渡してください。**

記者「おかしいな・・学者さんに貸した覚えなんてないのだけれど。」

他「へえ。なるほど。・・それが私に関係あるとは思えないのだが？」

「ネクタイと領収書」に対して

記者「間違いない。これは私のネクタイだ。しかし、何故学者先生が持っているのだろうか・・？

　　　おかしいな？商人さんに送ったと思ったのに。」

**証拠カード「郵便の行方？」を渡してください。**

商人「これは確かにうちの店の領収書だね。サインだってうちの店員のものだ。

　　　あいにくと私はこのネクタイ自体に見覚えはないが。」

他「特に何もわからないなぁ・・・？」

「郵便の行方？」に対して

商人「なに？ネクタイを記者が私に送った？しかし、私の手元にはなにも届いてはいないぞ？

　　　送ったならなぜ、私の手元には何もないのかね？」

学者「いや、私のもとには何も来てないぞ？このネクタイは直接店へ行って買ったものだし。」

他　「記者からの郵便？いや、私のところには来ていないよ。」

「ネクタイと領収証」「郵便の行方」に対して

商人「ちょっとまってくれ・・・。（間をおいて）・・・どうやら従業員が、仕入れの品と間違って

　　　売ってしまったようだ。あとは私がやっておくよ。」

　　　**真相カード「手違い」を渡してください。**

他　「特に何もわからないなぁ・・・？」

「無人教室」

概要

　学者先生から、子供たちが子供教室に来ないと言われる。その真相は漫画をよんでいたのだった！

ハンドアウト

依頼主：学者

子供たち相手に学習塾を開いているのだが、どういうわけか、生徒たちが一人もやってこない。

親たちに聞いても、子供はちゃんと言っているというし・・・どういうことか調べてほしい。

初期証拠カード「子供が来ない」に対して

靴磨き　「そういえば最近、子供たちが「竜の玉」がどうとか話しているな。

　　　　　なんのことだかはわからんが、流行っているものではあるらしい。」

　　　　　**証拠カード　「竜の玉」を渡してください。**

商人・マスター「うちの子供は、ちゃんと子供教室にいっているというのだが・・・」

他　　「学者先生の教室ねえ・・・たしか路地を少し行ったところにあったなぁ・・・」

　　　　　\*貴族は多少動揺した後に、台詞を出してください。

証拠カード「竜の玉」に対して

新聞記者　「それは・・東方から伝わってる「MANGA」と呼ばれる絵巻物の一つのハズだ・・・。

　　　　　　たしか貴族様が熱心な収集家だったような・・・」

　　　　　　**証拠カード「貴族の所有物」を渡してください。**

貴族　　　「な、なんのことだろうか・・・？」明らかに動揺してください。

他　　　　「竜の玉・・・？なんのことだろうかはわからないけど・・・流行ものなら

　　　　　　新聞記者に聞くのが手っ取り早いんじゃないか？」

証拠カード　「貴族の所有物」に対して

貴族　　「あぁ・・・確かに私は持っているが・・・。それがどうかしたか・・・？」

他　　　「へぇ・・・貴族様は趣味が本当に広いんだなぁ…。

　　　　　あれ？でもなんで子供たちの間で流行っているのだろうか・・・？」

証拠カード　「子供が来ない」「貴族の所有物」に対して

貴族　　　「・・・ああ、その通りさ。子供は私の家でMANGAを読んでいるよ。あんな小さいのに、

　　　　　　面白くもない勉強なんてかわいそうじゃないか・・・・。息抜きをさせたかったんだ・・。

　　　　　　学者の方には私の方から誤っておくよ・・・」

　　　　　　　**真相カード　「貴族の家で」を渡してください。**

他　　　　「うーん・・・われわれには推測するしかできないからなぁ・・・

　　　　　　直接貴族様に聞くのがいいのではないだろうか？」

「少年の一目惚れ」

概要

学者の息子が十日前に街で見かけた少女に恋をした、少女は頭に紫のバラをあしらった髪飾りをつけていたのだがどうにか少女を探して少年と会わしてあげられないだろうか。

ハンドアウト

依頼主：学者

息子が１０日前に待ちで見かけたという少女に恋をした。手がかりは紫のバラをあしらった髪飾りしかないのだが、どうにかして少女を探し出してほしい。

初期証拠カード「髪飾り」について

靴磨き「そういえば三日ほど前に君の言うのとよく似た髪飾りを拾ったぞ、見た感じ高そうなものだしお金持ちのものだろうな」

**証拠カード「高価な落し物」を渡して下さい。**

マスター「その髪飾りならとある服装展示会の後から急に流行りだした気がするな」

**証拠カード「きっかけは服装展示会」を渡して下さい**。

商人「その髪飾りなら五日前からウチで独占的に取り扱っているんだが売れ行きが好調でありがたいことだよ」

**証拠カード「販売は五日前から」入手**

他「最近町でよく見かけるけど詳しいことはわからないな」←他のNPCに行くよう伝えてください。

証拠カード「高価な落し物」について

貴族「これなら五日前娘に買ってやったものだよ、ほらここに娘の名前の刺繍が入っているだろう」

**証拠カード「持ち主は貴族の娘」入手**

他「金の刺繍が入っているしきっと高いものだろう、貴族さんならなにか知っているかもね」←貴族に行くよう誘導して下さい。

証拠カード「持ち主は貴族の娘」について

学者「そのリボンを彼女が手にしたのは五日前なのだろ？では十日前に息子が見た少女は貴族さんの娘ではないだろう」

他「貰ったものをその日になくすなんておっちょこちょいだね」←この証拠カードでは次の手がかりが出ないことを伝えてあげてください、ミスリードです。

証拠カード「きっかけは服装展示会」について

記者「五日前に開かれた服装展示会に取材しに行ったのだが、会場では服の展示のために人間と見間違うほど精巧な人形がたくさん使われていてびっくりしたよ」

**証拠カード「精巧な人形」を渡してください。**

他「詳しいことは知らないな、新聞に載っていたから記者さんなら知っているんじゃないか」

証拠カード「販売は五日前から」「精巧な人形」の二枚を出された場合

学者「もしかすると息子の見た少女というのは展示会で使用されていた人形なのかもしれないな」

真相カード「淡い初恋」を渡して下さい。

他「それは学者さんに伝えてあげたほうがいいんじゃないか？」

カードがどちらか一枚の場合

学者「ちょっとそれでは断定できないな、確信するためにはもっと手がかりがほしいところだ」

　　もう１枚を出すように誘導をお願いします。

「盗まれた宝石を取り戻して」

概要

　家宝の宝石が盗まれてしまった。盗品を問屋が商人に流したものを貴族が購入した。

　しかし、調査の中で鑑定書が偽造であることが分かったので、説明して返してもらおう。

ハンドアウト

依頼主：町人

家宝のエメラルドが盗まれてしまった。このままでは、先祖に顔向けができない。

エメラルドの特徴を教えるから、発見して取り戻してきてほしい。

台詞

初期証拠カード「盗まれたエメラルド」に対して。

貴族　　「エメラルド・・・？確かに先日上物を購入したが、盗品なんて冗談はやめてくれ！

　　　　　私の名誉にかかわることだし、第一鑑定書だってついているんだ！！」

　　　　　**証拠カード「発見されたエメラルド」を渡してください。**

新聞記者「ええ。関係あるかはわかりませんが、盗品のロンダリングが多発していますね。」

　　　　**証拠カード「問屋がらみの犯罪」を渡してください。**

商人「確かにうちでは、宝石も扱ってはいるけれど、ちゃんと鑑定書付きの品です。

　　　盗品なんて扱っていませんよ。」

　　　多少、狼狽えてるというか、焦りをみせつつ毅然とした態度でお願いします。

靴磨き「エメラルド・・・？生憎、そんな高級品縁なんかさっぱりでね。

　　　　ああ、でも盗まれた宝石の売買ルートとかを新聞記者が調べてたっけな・・・？」

　　　さりげなくのヒントをお願いします。

マスター「エメラルドか・・・。うーん、そういえば貴族様が買ったとか、いってたなぁ・・・・」

学者　「宝石の盗難とロンダリングが最近、起きているみたいだね。新聞記者が調べていたよ。」

証拠カード「発見されたエメラルド」に対して。

商人「・・・！！いや、鑑定書だってあったんだ！！盗品のハズがないだろう！！やめてくれ！！」

　　　あー、こいつ絶対なんか知ってるな、って思わせていただければ幸いです。

学者「おや・・・？これは・・・確信は持てんが・・・もしかしたら偽造ではないかね・・・。

　　　私の目に間違いがないといいのだが・・・・。」

　　　**証拠カード「もしかして偽造？」を渡してください**

他　「おお、エメラルドは見つかったのかい。よかったじゃないか。」

証拠カード「問屋がらみの犯罪」に対して

商人　「・・・！！ならば偽の鑑定書だという証拠を持ってきたまえ！！」

貴族　「なんだね？私の宝石が盗品とでもいいたいのかね？ならば具体的な証拠を出したまえ！！」

他　　「あぁ、そんな話もあったなぁ。私たちには関係ないだろうけれども。」

証拠カード「もしかして偽造？」に対して

商人　「・・・！！信用にもかかわるのに、偽の鑑定書なんてつくるわけがないだろう！！

　　　　いい加減にしてくれ！！」言い逃れる犯人みたいな感じでお願いします。

貴族　「うーん・・いや、しかし・・商人は本物といってたし・・彼が偽物を渡すとは考え難い・・」

他　　「えぇー！！鑑定書は偽造だったのかい？たまげたなぁ。学者様がいうならそうなんだろうけど」

証拠カード「もしかして偽造？」「問屋がらみの犯罪」に関して。

商人　「・・・実は私も、あの鑑定書は偽造だと考えているのですが・・・

　　　　信用にかかわるため、いうに言えず・・・そこまでご存じなら私も腹をくくりますが・・・・」

　　　　**証拠カード「鑑定書は偽造」を渡してください。**

貴族　「もしかしたら・・・彼も被害者なのかもしれんな・・・・。商人に話を聞いてくれ。

彼が盗品というなら、私も速やかに返却しよう。」

他　　「ふーむ、宝石のロンダリングねぇ・・・大変なんだなぁ・・・で。私に関係あるのかい？」

証拠カード「鑑定書は偽造」に対して

貴族「このエメラルドは盗品だったのか。それを所持していることは私の名誉にかかわる問題だ！

　　　君、これを持ち主に届けてくれ！！よろしく頼んだぞ！」

　　**真相カード「戻ってきたエメラルド」を渡してください。**

「失われた巻物」

概要

学者の所有する貴重な本が紛失した。しかしそれは、保険金詐欺を目論んだ学者の自作自演であった。学者は馬車に細工して、そこに本（巻物）を隠していたのだ。

ハンドアウト

依頼主：保険会社

先日この街で行われた「世界の文化」展で、展示品の一つである学者の所有する稀少本が紛失した。

その本には保険がかかっており、その支払いの前にこの本のありかの調査を依頼したい。

なお本はジパングとよばれる東洋の島国の書物の写本である。

初期証拠カード「本の紛失」に対して

学者　　「あの本を探してくれるのかね。あれは本当に貴重な本でね。この国で所有しているのは私くらいだろうな。頼まれて展示会へ提供したのだが、まさか無くなってしまうとはね……。まあ、頑張ってくれたまえ」

貴族　　「あの件か。あれさえなければ展示会は大成功だったのだがな……開催者の一人としては残念だ。協力してくれた商人氏も残念がっていたよ」

商人　　「あの本に関する調査ですか……。役に立つかはわかりませんが、紛失が発覚した時の状況を説明しましょう。あの時は展覧会後に予定されていたパーティーの開始直前で、貴族様とマスター氏、記者氏は既にパーティー会場に入っておりました。私と学者様は展示会場で片付けを手伝っていて、臨時で馬車の御者をやっていた靴磨き氏は、展示会場とパーティー会場の間を往復していたようです」

**証拠カード「アリバイ」を渡して下さい。**

マスター「学者様も災難だったね。借金までして買った本だったそうじゃないか。まあそういう品は他にもたくさんあって、そろそろ借金で首が回らなくなってるらしいがね」

**証拠カード「学者の借金」を渡して下さい。**

記者　　「あの本ですか、紛失前に取材させてもらったので覚えてますよ。あの本は巻物と言って、細長い芯に長い紙を巻きつけて保管しておくものだそうで、広げるとすごく大きく見えるのに、丸めるととても小さくなるんです」

**証拠カード「巻物」を渡して下さい。**

靴磨き　「あの日は雇われ御者としてあそこにいましたがね。会場内には入らなかったし、興味もなかったから詳しいことは全然知らないんですわ。他の人に聞いてください」

証拠カード「アリバイ」に対して

学者　　「商人氏の言う通りだ。私は片付けのために展示会場と馬車の停車場を何度も往復していた。注意していないと、貴重な品を適当に扱い出す者がいるのでね」

記者　　「ええ、あの時は取材のためにパーティー会場にいましたよ。貴族様やマスターもいました。紛失したのが発覚したあと、会場にいた人たちの持ち物検査がありましたが、何も見つかりませんでした」

**証拠カード「持ち物検査」を渡して下さい。**

靴磨き　「ええ、あの時は馬車で何度も展示会場とパーティー会場を往復してましたぜ。展示会場に戻ったら大騒ぎになってて驚きました」

マスター「ああ、あの時は会場にいたよ。パーティーの準備のために」

貴族　　「展示会の閉会式が終わって直ぐに靴磨き君の馬車でパーティー会場に移動して、それからずっとあそこにいたよ。出発前に馬車の車輪が外れてしまい、靴磨き君と学者氏に修理してもらっていたので、それほど早く会場入りしたわけではないが」

**証拠カード「馬車の故障」を渡して下さい。**

証拠カード「巻物」に対して

学者　　「ああ、確かにあの本はそういう作りになっているよ」

記者　　「私はさっき話したこと以上のことは知りませんよ」

他　　　「さあねえ、そういうのには詳しくないから」

証拠カード「学者の借金」に対して

学者　　「隠しても仕方ないから白状するが、それなりの額の借金をしているのは事実だ。とはいえ、返済のあてはある。心配は無用だ」

マスター「いや、俺も詳しいことは知らないんだ」

その他　「聞いたことがある気もするが、詳しくは知らないな」

証拠カード「持ち物検査」に対して

記者　　「他には何も知りませんよ」

貴族＆マスター「確かに持ち物検査はやっていたな。何も出なかったが」

残り　　「その場にいなかったので、詳しくは知らない」

証拠カード「馬車の故障」に対して

貴族　　「あれには往生したな。割とすぐに直ったから良かったが、時間がかかっていたら面倒な事になったかもしれない」

学者　　「ああ、確かにそんなことがあったな。私も少し修理を手伝ったよ」

靴磨き　「あれには驚きました。壊れるような馬車には見えなかったんで。そうそう、あの馬車に関して変な話がありまして。あれはレンタルの馬車だったんすが、展示会の前日と、更に翌日にも学者さんが借りたそうで。翌日の方はわざわざあの馬車を指名したんだとか。普通壊れた馬車なんて借りないと思うんですがねえ。まあ、あれは商人の知り合いの馬車なんで、詳しい話は彼に聞いて下さい」

**証拠カード「学者が馬車を？」を渡して下さい。**

その他　「へえ、そんなことがあったんですか」

証拠カード「学者が馬車を？」に対して

商人　　「ええ、確かにそれは私の知り合いの馬車です。たしかにそれは変ですね。調べてもらいましょう……（少しの間）。結果が出たようです。車輪を意図的に外れやすくした痕跡と、馬車の下に小さな箱を取り付けていた痕跡が見つかったそうです」

　　　　　**証拠カード「細工の痕跡」を渡して下さい。**

学者　　「たまたま連続して必要な用事ができただけだよ。他に理由はない」

適当に狼狽えて下さい。

証拠カード「細工の痕跡」、「学者の借金」、「巻物」に対して（この三つが絶対必要というだけで、他の証拠が一緒に提示されても問題はない）

学者　　「そこまで調べられては、言い逃れは出来ないね。展示会の前日に思いついた割には上手くできたと思ったのですがね。正直、馬車の故障のタイミングが合わなければ実行しないつもりだったし。悪いことはできないものだ」

　　　　　**真相カード「学者の自白」を渡して下さい。**

その他　「そこまで調べが付いているなら、直接学者に問いただすべきでしょう」